**アレクサンドル・カントロフ（ピアノ）**

**Alexandre Kantorow**

**“カントロフはリストの生まれ変わりだ。私は、彼のように楽器を操り、これらの作品を奏でるピアニストを他に知らない”**

**Jerry Dubins（『ファンファーレ』誌）**

**22歳で挑んだ2019年のチャイコフスキー国際コンクールにおいて、フランスのピアニストとして初めて優勝。同時にコンクールの歴史上３度しか与えられていないグランプリも獲得した。**

**演奏活動と録音活動のいずれも、各地の批評家たちから絶賛を浴びている。今やフランス・ピアノ界のホープとして定評のある彼は、早くに演奏活動を開始。16歳の時、ナントとワルシャワのラ・フォル・ジュルネ音楽祭から招かれシンフォニア・ヴァルソヴィアと共演して以来、数多くのオーケストラからソリストとして招かれており、とりわけゲルギエフ指揮マリインスキー劇場管弦楽団と定期的に共演を重ねている。**

**来シーズンは、パリ管弦楽団、シュターツカペレ・ベルリン、ロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団、フィルハーモニア管弦楽団、ロイヤル・ストックホルム・フィルハーモニー管弦楽団、トゥールーズ・キャピトル国立管弦楽団、ブダペスト祝祭管弦楽団、ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団との共演が控えている。**

**またアムステルダムのコンセルトヘボウ、フィラルモニー・ド・パリ、ベルリンのコンツェルトハウス、ブリュッセルのパレ・デ・ボザールをはじめとする一流ホールで演奏を披露し、ラ・ロック・ダンテロン国際ピアノ音楽祭、ジャコバン国際ピアノ音楽祭、ヴェルビエ音楽祭、ルール・ピアノ・フェスティバルなどの著名な国際音楽祭に出演している。室内楽にも精力的に取り組んでおり、ヴィクトル・ジュリアン＝ラフェリエール（チェロ）、ルノー・カプソン（ヴァイオリン）、ダニエル・ロザコヴィッチ（ヴァイオリン）、マティアス・ゲルネ（バリトン）らと共演を重ねている。**

**カントロフはBISと専属録音契約を結んでおり、デビュー・アルバム『A la russe』は、クラシカ誌の年間最優秀ショク賞（2017）を受賞、ディアパゾン誌、ピッチカータ誌、ピアノニュース誌の特薦盤に選ばれるなど、広く注目され高い評価を得た。その後『サン=サーンス：ピアノ協奏曲第3・4・5番』（2019）、『ブラームス、バルトーク、リスト』（2020）をリリースし、ディアパゾン・ドール賞と年間最優秀ショク賞を2年連続で受賞。特に2020年のピアノソロアルバムは、グラモフォン誌のエディターズ・チョイスにも選ばれ、彼の技術と芸術性が隅々まで繊細に表れた名盤と絶賛された。最新盤は『ブラームス：ピアノ・ソナタ第3番、左手のための「シャコンヌ」、バラード集』（ディアパソン・ドール賞）。**

**2019年、フランス批評家協会賞の年間最優秀新人音楽家部門を受賞。**

**2020年には、先述のサン=サーンスの協奏曲アルバムで、フランスの最も権威ある音楽賞「ヴィクトワール・ド・ラ・ミュジク・クラシック」の2部門（年間最優秀録音部門/年間最優秀器楽ソリスト部門）を同時受賞するという快挙を成し遂げた。**

**フランスとイギリスの血を引くカントロフは、これまでにピエール＝アラン・ヴォロンダ、イーゴリ・ラシコ、フランク・ブラレイ、レナ・シェレシェフスカヤに師事。サフラン財団賞および、バンク・ポピュレール財団賞を授けられ、助成を受けている。**

（1,331字／2022年4月現在）